リトルバスターズ狩猟録

ルゥー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リトルバスターズ狩猟録

【Ｎコード】
Ｎ１８３８Ｒ

【作者名】
ルゥー

【あらすじ】
冬休み、恭介の音頭取りでモンスターハンターを始めたリトルバスターズ男子、休みということも手伝い、他のメンバーが帰省いないことも拍車をかけてすっかりはまってしまった理樹達だが、ある日部屋でプレイしているとＰＳＰから光が放たれ、たまたま部屋に居た鈴を含め気絶、目を覚ましたらモンスターハンターの世界にいた。

理樹達四人による狩猟記録、２ｎｄＧの世界観で書きます。

プロローグ（前書き）

またまた何を書いてるんだろう……

プロローグ

「理樹、援護してくれ」

「恭介、クーラードリンク持ってねえか？」

「真人……お前また忘れたのか？」

「この馬鹿が、こんがり肉だけでなくちゃんと他のアイテムも持ってこいと言っただろう」

「仕方ねえだろ、俺の筋肉を十二分に発揮するにはスタミナが必要なんだよ」

「筋肉馬鹿が」

「二人とも落ち着いて、ほら来るよ。真人はクーラードリンクなら僕があげるから」

「おっ、すまねぇな理樹」

「むっ、そうだな」

理樹に促された二人が再びＰＳＰ画面に集中する

ここまでのやり取りを見れば大概の人はお分かりだろうが、今四人、理樹、真人、謙吾、恭介の四人は理樹と真人の部屋に集まりモンス

ターハンター2ndGをプレイしていた。　何故この四人がそんな事をしているのかというと、話は二週間前に遡ることになる。

二週間前

恭介の宣言はいつも突然だ。

「よし、モンスターハンターをやろう」

「「「は？」」」

理樹、真人、鈴、謙吾の声が重なる。　全員が鳩が豆鉄砲を喰らった時のような顔をしていた。

冬休み前日の昼食時。明日から冬休みということもあり、どこか浮かれた雰囲気が流れる食堂で、なんの脈絡もなく恭介が切り出した。

「また突然だね、恭介。もう慣れたけどさ……」

理樹の言葉に、恭介を除いた四人が軽く頷いて同意を示す。

「恭介、そのモンスターハンターってのはなんなんだ？」

「その名前の通りモンスターを狩るゲームさ」

実際にどこかから取り出したソフトを見せながら恭介が答える。

「何でそんなもんをするんだよ」

「馬鹿の言うとおりだ恭介、何故それをするのか説明してくれ。別段、俺はテレビゲームに興味はないが……」

「そりゃあ、時代がこれをしろと叫んでいるからさ」

「何だそりゃ」

答えになっていない恭介の答えを聞いて真人が呆れた声を漏らす。

「そういえばきょーすけがそんなタイトルの漫画を読んでた気がするな」

呆れた視線を恭介に向けていると、鈴があっさりと理由を漏らしていた。

どうやらいつものように漫画に影響されたらしい

「ま、まあ、どうせ明日から冬休みだやることはないだろう？」

恭介がダラダラと汗を流しながら皆に言う。

皆、呆れて声を出さずにいたのだが、それを恭介は了承と受け取り、後で理樹の部屋に集合することになった。

2時間後

「よし、という訳でこれよりモンスターハンターを開始する！」

「人の意見は無視かよ……」

「まあ、飽きるまで適当に付き合うしかあるまい」

「あはは……」

それを聞いて三人がそれほど乗り気ではない反応を見せるが恭介は構わず続けた。

「ゲーム機とソフトはこちらで揃えた。好きな色を取ってくれ」

そう言うと恭介はＰＳＰとソフトを並べた。

「恭介、よく用意出来たね」

「ふっ、手に入ったからこそ今回これを提案したからな」

「ああ、成る程……」

ＰＳＰが手に入ったから漫画で読んだモンスターハンターをしようと思ったのだろう。

「あれ？　そういえば鈴はどうしたんだ？」

「あいつなら興味ないいって言ってどっか行ったぞ、まあ四人までしか通信できないからちょうどよかったのかもな」

「そうか……」

「まあ、とりあえずゲームの説明を行うぞ、このゲームはタイトルの通りファンタジー世界で巨大なモンスターを狩るハンターとなり、美しく過酷な自然を舞台に狩猟生活を送るゲームだ。もちろん仲間との協力プレイも可能だな」

「恭介、俺はテレビゲームにあまり興味はないのだが……」

「俺もだ」

謙吾と真人がやはり土壇場になって抵抗しだした、やはり外で遊ぶほうが好きらしい。

「まあまあ、一度やってみろよ、何事も経験だぜ？」

「むぅ……、わかった。一回だけだからな」

どうやら二人は納得したようだ。こうなると流石はリトルバスターズ。

一気に真剣になった。　何事にも全力なのがリトルバスターズの美点である。

「とりあえずソフトをセットして電源を入れてくれ」

言われた通りに電源を入れる。

そしてゲームが始まった

始めにオープニング映像が流れると全員黙って見始め、最後にはやる気になっていた。

「なんだこの熱そうなバトルは、俺の筋肉の出番じゃねえか」

「仲間と協力しての勝利！まさに俺達リトルバスターズに相応しいじゃないか」

「この太刀、興味があるな……俺の剣術も通じるのか？」

と、いう訳で流石は大ヒットゲーム、あっという間に全員がゲームに引き込まれていた。

その後、真人と謙吾がいがみあったりと色々あったが、日が暮れる頃にはすっかり全員がはまっていた。

珍しいことに謙吾も部活が剣道場が修理中のため休みで、あれから全員ではまっていた。　はっきり言って廃人街道まっしぐらである。

ちなみに鈴はアイルーが気にいったのか、ぽかぽかアイルー村をプレイしていた。

そして冒頭のシーンに戻る。

あれから二週間。四人はすっかりモンスターハンターにはまっていた。

そしてその日も、四人で狩りをしていたのだが……

「きょーすけ」

「ん？　何だ鈴」

「電源が切れそうだ、充電器を貸してくれ」

「わかった、しかし待ってくれ、手が放せない」

そう言いつつ恭介が手を充電器へ伸ばした瞬間。

「あ？」

「お？」

「あれ？」

「む？」

四人の画面が真っ白になった。

「おい、誰か閃光玉を使ったか？」

「いや、誰も使ってないけど……」

「馬鹿兄貴、あたしのもおかしくなった」

そう言って鈴が差し出したＰＳＰの画面も真っ白だった。

「おかしいな……故障か？」

「だけど四台同時にっておかしくない？」

「まあ、仕方がない。とりあえず電源を切るか」

そう言って恭介は電源を切ろうとしたが……

「おかしい、落ちないぞ」

「俺もだ」

「僕も」

「あたしもだ」

「右に同じだ」

五人全員が同じく電源を切れなかった。

「これはどうしたーー」

ものか、と続けたかったのだろうが、残念ながらそれは敵わなかった。

何故なら

「うおっ！？」

「何だこれは！？」

「うわっ！？」

「眩しいわぼけぇ！」

「これは！？」

突然ＰＳＰが強い光を放ったからだ。

光はどんどん強くなった

……そして

ガシャッ！

光が収まると、ＰＳＰを残して五人姿は消えていた。

第一話　その名はリトルバスターズ（前書き）

駄文ですがどうぞ、多少キャラの性格も変えています

第一話　その名はリトルバスターズ

「ふー、ようやく卒業できたな」

「ああ、長かったぜ」

「しかし、それも今日で終りだ」

「うん、やっとここまで来たね！」

「よし！　それじゃあ出発だ！」

「「「おおー！！」」」

こうして、この世に四人のハンターが生まれた。

彼らは後にラオシャンロンの討伐という前人未踏の偉業を成し遂げ、伝説として末永く語り継がれることとなる。

その四人のチーム名をリトルバスターズという。

彼らは異世界の出身であると語っているが、彼らがどのような人生を過ごしたのかはわかっていない。

メンバーの一人であるキョウスケ・ナツメは東方出身であるというが、それも定かではない。

しかし、メンバー全員の名前は東方風であったことから東方出身であると考えられる。

しかし、彼らはラオシャンロン討伐後に姿を消し、その姿を見た者はいない、しかしギルドに残された記録だけが彼らが実在し、かつ輝しい戦歴を残したのは事実である事を伝えてくれる。

～ドンドルマ人物年鑑より抜粋

「あ～、とりあえずどうする？」

「まずはクエストをこなしてハンターランクを上げないと」

「その前にまずパーティーとして登録しないといけないな」

そんな事を話しながら歩いているのは初心者用のハンター装備を着けたリトルバスターズの四人である。

四人は先日、新人ハンター訓練所を卒業したばかりである。

「じゃ、酒場に行くか」

四人は酒場に向けて歩き出した。しかし、四人とも二年も経ったせいかかなり成長していた。

特に理樹は背が伸びて今では１８０近くあった。容貌も以前の優しげな表情より少し引き締まっていて、同一人物とは思えない程だった。

他の三人はあまり変わっていない、強いて言えば謙吾の髪が伸びていることくらいだろう。

ところで、この四人がハンターになっているのには理由がある。

それには二年前に遡る。

二年前、光に包まれた五人は気がつくと、ベッドに寝かされていた。

始めは寮の部屋かと思ったのだが、入って来た人を見て全員が腰を

抜かしてしまった。

何故なら入って来たのは龍人族の長老だったからだ。

この時点でモンスターハンターの世界だと気付いた恭介は話して情報収集に務めた。　結果わかったのはここがポッケ村だということ、自分達は倒れていたのをハンターが見つけて運んで来てくれたことがわかった。

そしてその後は恭介のターンであった。　モンスターハンターの世界だと分かるや否や瞳を輝かせた恭介は八面六臂の大活躍であっというまに理樹達五人がハンター養成所に入れるよう話しをつけてきた。

そして、ドンドルマにあるハンター養成学校で二年間、徹底的に基礎を学び今日、晴れてハンターとなったのだった。

「そう言えば恭介、鈴はどうするの？」

「ん？　ああ、あいつも何とか一人前と言うことで俺らと来るんだと」

「ふーん」

「何だ、鈴の奴はどうしたって？」

「僕らと来るんだって」

「へぇ～」

ちなみにこの場にいない鈴はハンターになることをあっさり拒否。
一応ハンターになる資格は取ったものの、途中からネコバァに弟子入りしてアイルーの訓練などを行っていた。

「と、着いたぞ」

話している間に、街の中心にある巨大な建物にいつの間にか着いていた。
全てのハンターを統率するハンターズギルドの本部である。

ギイッ

恭介が酒場の扉を開けると熱気と酒の匂いがどっと襲い掛かってくる。

「まだ昼間なのに凄いね」

周りを見て理樹が言う。
昼間だというのにあちこちで酒を飲んでいる。

「絡まれる前に行くぞ」

理樹達は素早くカウンターに向かった。

「いらっしゃいませ、クエストの受注ですか？」

「いや、パーティーの登録をしたい」

「そうですか、それではこちらの用紙にご記入下さい」

そう言って紙を渡してくる。

「書き終えられましたら私の所に出して下さい」

「わかった」

そう言って恭介が用紙を受け取ると、四人は空いているテーブルに座った。

「リーダーはどうする？」

「恭介でいいんじゃない？」

「いや、理樹がいいんじゃないか？」

「ええ!?　無理だよリーダーなんて!?」

「そんな事はない」

「そうだな、確かに理樹なら大丈夫だろう」

「じゃっ、理樹で登録しておくぞ」

「そんな……」

「大丈夫さ、心配するな理樹」

「ならせめてサブリーダーは恭介がなってよ」

「わかった」

「なら次は……」

という感じで書いていき、５分後にはカウンターに提出していた。

「確かに受理しました。ご確認させていただきます。リーダーは
リキ・ナオエ様　そしてチーム名ですが……」

ちらりと受付嬢が理樹を見る。

理樹は力強く頷いた。

「リトルバスターズで」

こうして、伝説のパーティー、リトルバスターズは結成された。

個人装備と状況説明（前書き）

説明です

個人装備と状況説明

理樹

武器　チェーンブリッツ
頭　ハンターキャップ
胸　ハンターレジスト
腕　ハンターガード
腰　ハンターコート
足　ハンターレギンス

真人

武器　バスターソード
頭　ハンターヘルム
胸　ハンターメイル
腕　ハンターアーム
腰　ハンターフォールド
足　ハンターグリーヴ

謙吾

武器　鉄刀
頭　ハンターヘルム
胸　ハンターメイル
腕　ハンターアーム
腰　ハンターフォールド
足　ハンターグリーヴ

恭介

武器　ボーンシューター
頭　ハンターキャップ
胸　ハンターレジスト
腕　ハンターガード
腰　ハンターコート
足　ハンターレギンス

全員のハンターランクは1で、まだドンドルマのハンター養成学校を出たばかり、これからギルドによって配属されたポルカ村に向かう事になる。

真人は大剣とハンマー使い。

謙吾は太刀使いであり、理樹はライトボウガン、恭介はヘビィボウガンと片手剣を使う。

鈴はネコバァの代わりにポルカ村に赴任した。

第二話　ポルカ村（前書き）

第二話です

第二話　ポルカ村

ドンドルマから馬車で三日、ここはシュラーフ地方。最近開発された地域であり、これまではやって来るのはハンターだけであった。

見渡す限り林が続く地方であるが、最近発見された洞窟で鉱石が発見され、調査の結果、火山があったことが判明した。

現在は死火山となっているカルデラ式火山の中心部にポルカ村はあった。

周りは岩山で囲まれており、岩をくり抜いた洞窟を抜けないと村には辿り着けず、空を飛ぶモンスター以外は近付けない為、非常に安全で、今まで旅のハンターのみで周辺の安全を確保していたが、周りにモンスターが増加して、外との行き来がしにくくなった為、ハンターを招くこととなった。

そんなポルカ村に向かう馬車の姿があった。

「真人、もう少し詰めてよ」

「何だ理樹、てめぇの筋肉が邪魔だからさっさと下りて下さいってか！」

「うっさい！」

「ガハッ！」

「ちょ、ちょっと真人。こんな所で気絶しないでよ」

「おい、おまえら馬車の中で暴れるなよ」
「ごめん恭介。それより真人はどうしよう？」
「何だ鈴。また気絶させちまったのか？」
「捨てて置けばいい、真人なら追い付くだろう」
「（こくり）」
「いやいや二人とも、他の馬車に迷惑だから……」
「理樹……ツッコムところはそこか？」
意外と非情な発言をした理樹に恭介がツッコム。
「仕方ない、僕が歩くよ。真人は僕が降りた分空いた所に載せておいて」
そう言って馬車を降りる理樹。
リトルバスターズの四人は鈴を含めた五人で赴任先のポルカ村に向かっていた。
「ところで恭介。何でポッケ村じゃないんだ？」
謙吾が尋ねる。
「ん？　ああ、それはポッケ村にはすでにハンターが派遣されてい

てな、俺達はいけなかったんだ」

「なら、何でポルカ村なの？」

馬車の横を歩きながら理由樹が尋ねる。

「そこの村長と知り合ってな、是非来てくれと頼まれたんだ」

それを聞いて呆然とする三人。

「恭介……その人脈はどこから出てくるのさ」

「まあ、知り合いだというのならやりやすくて良いかもしれん」

「まあ、きょーすけだからな」

「ま、とりあえずは向こうに着いてから話すさ」

そう言って馬車を操る恭介。

五人は平和な旅路をおくっていた。

一方、こちらはポルカ村の北にあるクロス密林。

唯一、ドンドルマに通じる街道があり、ポルカ村に向かう隊商も通ることもあって貴重な生活物資を届けてくれるポルカ村にとっては生命線である

しかし、この森では二頭のモンスターが覇を唱えんと争っていた。

周りをそれぞれの群れのランポスが囲み、リーダーに向けて声援なのか鳴き声を上げている。

中央で争っているのは二頭のドスランポス。

クロス密林に暗雲が立ち込めていた。

その頃、そんな事が起きているとは露知らず、リトルバスターズの面々はクロス密林を通り、無事ポルカ村に着いていた。

「うわー、大きいね」

理樹が岩山を見上げて呟いていた。

「村はどこにあるんだ？」

「この中だ」

「中ぁ？　どう見ても山じゃねえか」

「馬鹿兄貴、もったいぶらないでさっさと言え」

「まあ、見たほうが早いさ」

そう言って馬車を進めると、岩山にポッカリと穴が空いていた。

「ここか？」

真人が恭介に尋ねると、穴の横から見張りらしき男が出て来た。

「何者だ？」

「ハンターズギルドから派遣されたハンターだ」

「ああ、貴方達が。失礼だが許可証は？」

「ここに」

言って、恭介が手渡した紙を確認する門番。

「確かに確認した。ようこそポルカ村へ」

「ああ、ありがとう」

恭介が礼を言うと、門番が道を開けてくれて穴の中に入ることが出来た。

「恭介、これは天然の洞窟か？」

周りの岩肌を見て謙吾が尋ねる。

「ああ、そうらしい。たまたまこの洞窟を見つけたからこそ、村が出来たらしいな」

ところどころに蝋燭が置いてある為、洞窟内は明るいが、非常に長い。

５００メートルほどした所でようやく出口が見えてきた。

「おっ、抜けるぞ」

恭介がそう言って、洞窟を抜けた瞬間、理樹達は歓声を上げていた。

「うおぉぉぉお！！何だこれ」

「これは凄いな……」

「凄く広いな、なぁ理樹」

「う、うん。凄く広いね」

そう言う理樹達の目の前に広がったのは見渡す限りの草原と、湖だった。

「恭介！　これってどのくらいの広さがあるんだ？」

「全長１０キロ、幅５キロ。中心に湖を持ち、周辺には草原が広がるのがポルカ村で、世界三大名景に入る予定だそうだ。ここは昔火

山で、ここは昔噴火口だったんだ」

「それって阿蘇山と同じカルデラ式火山だったってこと？」

「そうだ、中心にあるのは火山湖でそのほとりに村がある。草原を利用したアプノトスの牧畜が有名になりつつあるな」

「それにしてもスゲーな」

「周りが山に囲まれている為に、モンスターがいないのが、特徴だからな。多分これから大きく発展するだろう」

恭介の説明を聞きながら馬車に乗った理樹達リトルバスターズはポルカ村に到着した。

村に入ると龍人族と思われる青年が現れた。

「やあ、キョウスケ。長旅ご苦労様だね」

「久しぶりだな、イアン」

二人が親しげに挨拶を交わすのを見て理樹が尋ねた。

「ねぇ恭介、この人は？」

「ああ、こいつはイアン。ポルカ村の村長だ」
「初めまして、イアン・マクガレーです。ポルカ村の村長をやってます」
それを聞いて理樹達は驚いていた。　何せ自分達と変わらない容貌だったからだ。
「ははっ、驚いてるみたいだね、でも僕はこう見えて百歳だよ？」
「「「え！？」」」
「ああ、そういや龍人は寿命が数百年、長いのは千年近いんだっけか」
「うん、だから僕は君達人間で言うと二十歳ぐらいになるのかな？」
「へぇ〜、そうなんですか」
「そうなんだ、所で恭介、家は用意したけど他にもハンターが来た時の為に大きく造ったから、いずれ他の人達が入って来たら共用して貰うことになるかも」
イアンが申し訳なさそうに言う。
「いや、構わないさ。わざわざ用意して貰ったんだからな」
「そうかい？　そう言って貰えると助かるよ。それじゃあ来てくれ、家まで案内するよ」

そう言って、歩き出したイアンの後に着いて行くと、村の奥に一際大きい建物が見えた。

「もしかして、あれか？」

「うん、そうだよ。これから村も発展するだろうからその試金石だね」

「そうか」

と、二人の会話を聞きながら四人は話していた。

「かなり、でかいな」

「うん、軽く十人以上は住めそうだね」

「まあ、とにかく筋トレする場所を探さねぇとな」

「ネコは入れていいのか？」

「鈴、アイルーだよ」

今だに、ネコとアイルーを混同する鈴にツッコム理樹。

リトルバスターズのメンバーは賑やかに新たな家へと向かった。

「さあ着いた。　今日からここが君達の家だよ、不都合な点があったら何でも言ってくれ、食事はキッチンがあるから自分で作ってもいいし、酒場で食べてくれても構わない。　鍵は各部屋に一つずつあるからね。使わない鍵は回収するから、後アイルーは地下に部屋があるからそこに住ませてね」

一気に説明すると、イアンはにっこりとこちらを見た。

「他に質問はある？」

「いや、特にない。何かあったらこちらから伝えるさ」

「うん、じゃあよろしく、クエストは酒場で受けれるから、じゃあね！」

そう言って、イアンは去って行った。

「さて、諸君。ミッション開始だ」

イアンが去った後、恭介が宣言する。

「ミッション！　村で店を発見して食材を購入せよ！」

………素直に、村の地理を把握してこいって言えばいいのに。

全員がそう考えたが、長旅で疲れていたためか、全員素直に従った。

「へえ、なかなか人が多いね」

村を歩きながら理樹が呟いた。

「ああ、村というと寂れたイメージがあるが、どうもこの世界は違うようだな」

隣にいた謙吾が返事をする。

「つーかよう、腹減ったし早く飯にしねぇ？」

「その飯の食材を買いに来たのだろうが」

「阿呆だな」

「へーへー、どうせ俺は飯のことしか頭にない阿呆ですよ、ごめんなさいでしたーっ！」

「真人！　こんな所で自虐するのは止めてよ！」

理樹が慌てて止めに入る。

四人は村に来たばかりのこともあって、かなり周りに注目されていた、それが今の真人の自虐でさらに強くなっているのだから堪らない、理樹や鈴は小さくなっていた。

「理樹、行くぞ」
耐え切れなくなったのか鈴が理樹の手を取って歩き出した。
それに周囲から温かい視線が注がれる。
それはそれで恥ずかしくなった理樹だった。

「ふぅ、やっと買えたね」
「ああ、まったくこの筋肉馬鹿が」
「何だ、やんのかよ」
「やろうというのなら、受けてたつぞ」
あの後苦労して、店を探し出した理樹達は、側で筋トレを始めた真人に不可解な視線を向ける人達の目を避けながら家に戻っていた。
「何だか異様に疲れたよ……」
そう言いながら理樹がキッチンに向かおうとする、この中でまともに料理が出来るのは理樹だけだからだ。
「理樹、きょーすけはどこだ?」

そこに鈴が尋ねる。

「あ、そういえばそうだね」

言われて先ほどまでいなかった恭介の姿を探す。

「おう、おまえら、今日は酒場で飯を食おうぜ」

すると、いきなり恭介が現れて食事に来るように誘う。

「え、まあいいけど」

そう言って残り三人を理樹が振り返ると、三人とも頷いた。

「よし、じゃあ行くぞ」

理樹達は恭介を先頭に酒場へと向かった。

「「「いらっしゃーい！！」」」

理樹達が酒場に入ると、一斉に声をかけられた。周りを見れば村人の大半が集まっていた。

「え？　えーと……」

理樹達が混乱していると、イアンが進み出て来た

「やあみんないらっしゃい、歓迎するよ。今日はささやかだけど歓迎の宴を用意したから楽しんでいってね」

そう言ってグラスを持つと、村人の方を向いて叫んだ。

「さあ！うちにも新しく五人のハンターを迎えることとなった！これは嬉しいニュースだ！　では五人の健闘を祈って乾杯！！」

「「「乾杯！！」」」

そして、祝われている筈の理樹達を置いて、宴はヒートアップしていった

「恭介、もしかしてこれの準備する時間を稼ぐ為に買い物に行かせたの？」

理樹が恭介に尋ねる。

「ん？　ああ、イアンに頼まれてな」

「それにしても凄い騒ぎだな」

「そうだね、うん？」

袖を引かれたので見ると鈴だった。

「理樹、あたしはネコ達に餌をあげてくる」

「わかった」

そう言って鈴は家に戻って行ったが、理樹は後で自分もついて行けばよかったと後悔した。

「おい、理樹。もっと飲めよ」

絡み酒。

「どうせ俺なんて、筋肉しか脳がないのに、モンスターに負ける筋肉しか持ってねえよ！」

泣き上戸。

「はは、理樹。どうした、もっと飲もうじゃないか」

笑い上戸。

ちなみに上から、恭介、真人、謙吾の順番だ。

「………誰か助けて」

三人に絡まれながら、理樹は長い夜を過ごした。

「遅いな……」

ちなみに鈴はそのまま家にいたため難を逃れていた。

第三話　初クエスト（前書き）

連続投稿はこれがラストです、この後は週末更新になります。

第三話　初クエスト

翌朝、目を覚ました理樹は朝食を作っていた。
昨日、遅くまで絡まれていたせいで多少寝不足だが、体調はいい。
恭介達三人は、昨日の酒が効いていて、まだベッドで寝ていた。
「おはよう、理樹」
「おはよう、鈴」
すると、途中で鈴が入ってくる。
どうやら朝食の匂いで目が覚めたようだ。
「女みたいだなお前」
鈴の攻撃
理樹に９９ダメージ。
「どこかのお母さんみたいだ」
鈴の追撃
理樹に９９９９ダメージ。
理樹は倒れた。

「？　どうしたんだ理樹？」

自分の言葉がいかに理樹にダメージを与えているか自覚がない鈴は、床に手をついた理樹を不思議そうに見ていた。

しばらくすると恭介達も起き出して来た。

みんなで理樹が用意した朝食を食べる。

「今日はどうする？」

「あたしは家で、ノブナガとアーサーとジライヤの訓練がある」

「そうか、じゃあ今日は四人で適当なクエストでも受けるか」

四人が頷いたその時、

「キョウスケ！　大変だ！」

イアンが入って来た。

「どうしたイアン」

恭介が驚いて尋ねる。

すると、イアンは一息つくと一気に叫んだ。

「クロス密林にドスランポスが出たんだ！」

それは理樹達が、卒業して初めての記念すべきクエスト第一号だった。

「詳しく話してくれ、イアン」

あの後、興奮気味にまくし立てるイアンを落ち着かせると、恭介は詳しい状況を聞いていた。

「昨日、キョースケ達が来た後に、きのこ狩りに行ってた村人がランポスに襲われたんだ。始めはたまにあるから明日にでもランポス討伐の依頼を恭介達に出す予定だったんだ」

「それで？」

恭介が先を促す。

「そしたら今朝、ボロボロになった商隊が慌てて内の村に避難して来てね、事情を聞いたら、ランポスの群れに襲われたらしいんだよ」

「それで何故ドスランポスが出たと？」

「うん、そしたらさっき、ギルドから連絡があって、飛竜が現れたらしくてアメリア草原のランポスの群れがクロス密林に向かったから警戒するようにと警告が……」

「成る程、そういうことか、たまにあるな」

「つまりどういうことだよ？」

真人の質問に理樹が答える。

「つまり、アメリア草原に居たランポスの群れが飛竜に追われてクロス密林に来た。そして集団で商隊を襲った。真人、ランポスが集団行動する時はどんな時があった？」

「わかんねぇ」

「この筋肉馬鹿が、少しは座学にもその情熱を注げ。理樹、たしか、ドスランポス、つまりリーダーが存在する時と繁殖期だった筈だが」

「そう、謙吾の言う通りだよ。つまり……」

「今が繁殖期でない以上、群れを統率するドスランポスの存在があると考えるのが妥当……と」

「うん、そういうことだね」

「なら、今回のクエストは……」

「うん、ドスランポスの討伐かな」

それを聞いて、やる気を出したのは恭介だ。

「いきなりこんなクエストを受けれるとはついてるな。よし！これより我がリトルバスターズはドスランポス討伐の為、クロス密林に向かう」

ミッションスタート！

恭介の宣言が家に響いた

3時間後、理樹達はクロス密林にやって来ていた

「恭介、どうするんだ？」

「ああ、それについてはリーダーである理樹が考えてある」

「えぇ！？　聞いてないよそんなの」

「当然だろ？　理樹はチームリーダーだぜ」

「そうだな、理樹なら大丈夫だな」

「理樹、この華麗なる筋肉がついてるから心配すんな」

謙吾と真人も賛成したため、理樹は渋々ながらも、作戦を立てる事を了承した。

「それじゃあ、今はまだお昼だよね？　それなら狩るのは明日にして今日はエリアの把握に徹しようか」

「成る程、確かに俺達は来たばかりでここの地形などをよく知らないからな」

「いい判断だぜ理樹」

謙吾と恭介は了承したが、真人は反論した。

「おいおい、そんなの後ですりゃあいいだろ？　理樹、そんな必要はねぇ、何があっても筋肉で吹き飛ばしてやるぜ」

「いや、筋肉は関係ないから」

理樹が冷静にツッコムが、真人は退かない。

「何を言ってんだよ理樹、筋肉がなければ武器を扱えない、つまり筋肉は全てに置いて優先されるのさ」

こうなると、真人を説得するのは無理だとわかっている理樹は妥協案を出した。

「わかったよ、じゃあ遭遇したら戦うことにするから」

戦うという理樹の言葉が効いたのか、真人も納得したようだ。

「よし、それじゃあ出発だ！」

恭介の音頭取りと共に、四人はベースキャンプを出た。

エリア１

理樹達の目の前に広がっていたのは、見渡す限りの木々の群れだった。

「うわー……凄いね」

「イアンの話しじゃ余りハンターも来ないから余り開拓も進んでないらしい」

恭介がそう言うが、まだ道があるだけましであろう。

「こりゃ、骨が折れそうだな」

真人の声が全員の気持ちを代弁していた。

エリア2

エリア2は先程と打って変わり、開けていた。

「お、川があるな」

謙吾の視線の先を見ると、川が流れていた。

「戦うならここがいいかもな」

「確かに、ここなら武器を使い易いな」

真人や謙吾は武器が大剣や太刀で獲物が長い為、広い場所でないと扱いにくく、理樹と恭介も距離を取って戦うボウガン使いの為、エリア2は都合がよかった。

「次行くぞ」

エリア4

エリア4は坂を昇った高台にあり、周りには樹がまったく生えていなかった。

「おお！　こいつは広いな！」

「ああ、ベストポジションだな」

周りに草木がないため不意打ちを受けることもない理想のエリアと言えた。

エリア３

「ここもまた樹が多いな……」

「でも、石段もあるし。広さはあるから、僕と恭介にはいいかも」

エリア３はエリア１程ではないとはいえ、かなり樹や草が生えていた。しかし、エリア１程には樹が密集しておらず、隠れてボウガンで狙撃するにはいい場所だった。

エリア４

「さて、行くか」
理樹達四人は緊張を漲らせて、洞窟に入った。
大体、密林のランポスは洞窟に巣をつくるため、入った瞬間に襲われてもおかしくないのだ。
洞窟内は思った以上の広さだった。
「すげぇ広いな」
「ああ………む、止まれ！」
と、先頭を歩いていた謙吾が突然静止をかける。
「どうしたの？」
理樹が小声で尋ねる。
「ドスランポスがいた」
謙吾の返事を聞いて三人が体を強張らせた。
「ランポスは周りに何体いる？」
「いや……それがいないんだ」
「いない？」
理樹が怪訝そうな声を漏らす。

「まあ、何にせよ好都合だな。一気に行こうぜ」

そう言って真人が大剣を構える。

今にも飛び出しそうな真人を理樹は慌てて静止した。

「ちょっと待って真人！　謙吾、恭介、周りにランポスの気配は？」

「ないな」

「俺も感じない」

「そう、なら真人と謙吾で攻撃、僕が援護するから、恭介は奇襲に備えて周りを警戒しといて」

「「「おう！」」」

三人は返事をすると真人と謙吾が飛び出していった。

グワァッ！グワァッ！

二人に気付いたドスランポスが声を上げる。

しかしその声は中断を余儀なくされた。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

五発の銃声と共に、レベル1通常弾がドスランポスの頭に叩き込まれたからだ。

通常、ボウガンは一発ずつしか撃てないのだが、理樹の持つライトボウガン、チェーンブリッツにはレベル1通常弾の速射機能が搭載されており、五発までの連続発射が可能だった。

ドスランポスが怯んだ隙に二人が距離を詰める。

「ウオラァァァア！」

大声と共に真人がバスターソードによる一撃を叩き込む。

その一撃で吹き飛ぶドスランポス。

何とかふらつきながらも立ち上がるがその目の前には謙吾が、

「はっ！」

気合いの叫びと共に振り降ろされた鉄刀がドスランポスの首を斜めに深々と切り裂く。

最後に声も出せずに身もだえるドスランポスに恭介の放ったレベル1貫通弾が突き刺さる。

これが止めとなりドスランポスは倒れた。

「よし！」

離れていた所で援護射撃をしていた理樹と恭介が、倒したドスラン

ポスに近付くと、謙吾が首を傾げていた。

「どうしたの謙吾？」

理樹が近付きながら尋ねると、謙吾は黙ってドスランポスを指で指した。

「ほら、こいつを見てくれ」

「ボロボロだね………」

言われるままに死体を覗き込むと、おかしな点に気がついた。

よく見ると、理樹達の攻撃した箇所以外にも傷がついていた。

「まるで、引っ掻かれたような痕だな」

恭介の言う通り、体には引っ掻かれたと思しき傷があちこちにあった。

「通りであっさりと倒せたと思ったら、どうやらこいつは既に弱っていたみたいだな」

「ああ、周りにランポスがいないから変だとは思ったんだが……」

「傷痕……いないランポス……まさか！」

傷痕を見て考え込んでいた理樹がそれに気付くのと、声が響き渡るのは同時だった。

ギャオワッ！ギャオワッ！

驚いて声のした方を見ると、先程倒したドスランポスより一回り大きいドスランポスが大量のランポスを率いて洞窟の入口に立っていた。

「何！？」

「もう一頭！？」

恭介と謙吾が驚きの声を上げる。

「ここは退こう、恭介！」

「おう！」

しかし流石は恭介、理樹の意図を正確に読み取り地面に何かを投げ付ける

途端にその玉から煙が巻き起こり、理樹達の姿を覆い隠す。

慌ててランポス達が襲い掛かるが、既に理樹達は洞窟から脱出していた。

ベースキャンプ

「くそ、ありゃあ一体何なんだ？」

ベースキャンプに戻ると早速、真人が理樹に先程の原因を尋ねていた。

「多分さっきの状況を考えると、群れが出会ったんだろうね」

「群れが？」

「うん、ほらアメリア草原からクロス密林に群れが移動したって言ってたじゃない」

「で、おそらく元々こちらに居た群れとかちあったと」

謙吾が後を引き継いで言った。

「うん、多分さっき倒したドスランポスは群れ同士の戦いに敗れたんだと思う、群れが出会ったらリーダー同士の決闘で決着を着けるらしいから」

「流石理樹、よく知ってるな」

「いや、普通に習ったじゃない」

「まあ、どちらでもいいが厄介な事になったな」

理樹と真人のやり取りが続きそうになったので、恭介がまとめに入った。

「そうだな、理樹の言う通りなら群れ二つ分のランポスがいることになるからな」

「さらにドスランポスがいる、リーダーに率いられたランポスは手ごわいからな」

「どうするんだ理樹？」

真人が尋ねると、理樹は5分程してから考え込んでいた顔を上げて策を話し始めた。

第四話死闘に続く

その者、大志を抱き、万事に備うる計を持つ。

力を誇示せず、富貴を望まず、従容と英略をもって他に傑出する。

その者、人の限界を知る狩人の長。

その口より紡がれし策は長久に語られ、森羅万象を知り、統べてを知る。

ドンドルマ人物年鑑～リトルバスターズリーダー、賢者リキ・ナオエの章より抜粋。

理樹の罠（前書き）

まだ変えた携帯に馴染みません、遅くなってすいません。週一くらいのペースで更新していきます。

理樹の罠

理樹の策に乗ることにしたリトルバスターズのメンバー達はそれぞれの役目を果たす為に動いていた。

真人と恭介は村に帰って材料の調達に、理樹と謙吾は威力偵察に出ては、ランポス達を１、２体ずつ減らしていった。

それに半日を費やした為、ドスランポス討伐は明日となった。

翌日、四人は準備万端でエリア２にいた。

「いい？２０体倒したらエリア３だからね？」

理樹が三人に作戦を再度確認していた。

本来なら恭介がリーダーを務めるべきなのだろうが、こちらの世界に来てから恭介は積極的に理樹をリーダーとして推していた。

その理由は後に明らかになるが、謙吾と真人も理樹がリーダーであることに異論はなかった為、この時に明らかにはならなかった。

しかし、この世界に来てから最も熱心に勉強し、この世界に順応しようとしてきた理樹をリーダーにした恭介の判断が結果的に正しいものとなり、『預言者』と言う二つなが着いたのはまた別の話である。

「おいでなすったぜ」

真人がそう言って大剣を構える、理樹と恭介もボウガンに弾を込めて狙いを定めると頷いた。

それを合図に真人と謙吾が走り出す、大剣を構えたまま走れているのは真人の並外れた筋肉の賜物と言えよう。

それにエリア2にやって来た五体のランポスが気付いて声を上げる。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

そこに四発の発射音が響く、五発は理樹のチェーンブリッツによるものだが、一発は恭介のボーンシューターのレベル2貫通弾である。

恭介の扱うボーンシューターはヘビィボウガンであり、理樹のチェーンブリッツのような速射機能などは搭載されていない、しかしその代わり威力は絶大、ライトボウガンが手数で押す武器ならば、ヘビィボウガンは一撃一撃を重くし重要視している武器である。

事実恭介の放った弾丸は、見事一体のランポスの頭を貫き死に至らしめた。

通常は頭を撃ち抜くのは困難であるが、貫通弾であることと顔の比較的柔らかい部位であることが幸いした。

仲間がいきなりやられたことに動揺している残りの三体に真人と謙吾の剣が迫る。

「うおおおっ！」

「ふっ！」

真人は激烈に、謙吾は静謐にランポスを倒した。

一瞬で仲間を倒された残り一体は仲間を呼ぶべく声を出す。

それを確認した恭介が再び射撃して、怯んだ所を謙吾が切り倒した。

「ふぅっ」

一息着くが、次の敵はすぐにやって来た。

ギャオワッ！ギャオワッ！

今度現れたのは十体近いランポス、それを迎撃すべく理樹達は武器を構えた。

「次！エリア３だ！」

「おうっ！」

あの後、何度もやって来るランポスの群れを撃退しながらエリアを移動してきた四人は、いま六回目の群れと戦っていた。

「理樹、後どれくらいだ？」

「もうそろそろかな、恭介！」

「わかった、先に行くぞ！」

そう叫んで恭介が走りさる。

「よし、二人とも。ここが正念場だよ」

「おうっ！」

「ああ！」

理樹の激に二人が答える、その理樹は恭介が抜けた穴を埋めるべく、レベル１散弾を撃ち込んでいた。

弾の集約率は低いが、かなり広範囲の敵を一斉に怯ませる事に成功する。

「真人！　謙吾！」

そこに間髪いれずに踏み込んだ真人と謙吾がそれぞれ獲物を振るう。

それぞれの攻撃で二体のランポスを仕留める。

これで残り八体。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

そこにレベル１通常弾に切り替えた理樹の援護射撃が加わり、一体を仕留め、残り七体。

そこに態勢を立て直したランポスが跳びかかってくるが、それは強い光に遮られた。

ギャワァッ！？

悲鳴を上げのけ反るランポス達、そこに真人と謙吾、理樹の一斉攻撃を受けて全滅した。

ランポス達の動きを止めたのは閃光玉だ。

絶命時に強力な光を放つ光虫を材料として使用した者で、しばらくの間モンスターの視界を奪うことが可能である。

理樹達が呼吸を整えていると、最後にランポスが上げた悲鳴を聞き付けたらしく、またランポスの群れがやって来た。

ただし……

「遂にお出ましか」

その群れにはドスランポスが居た。

通常、ランポス達は数体ずつにばらけて獲物を探しており、獲物を見つけると仲間を呼んで狩りを行う。

その為、ドスランポスと会う確率は低い為、探し回るには大量のランポスを相手にしなければならない。

しかしドスランポスを呼びよせる方法がある。

通常、周りに護衛を連れており、わざわざ出向くことは少ないが、仲間がやられ過ぎると群れの脅威を排除する為にやって来るという習性がある。

つまり、ランポスを適度に倒せば、こちらが狙ったエリアにおびき寄せることが可能なのだ。

「真人！　謙吾！」

「おう！」

「ああっ！」

上手くドスランポスをおびき出せたことを確認すると、理樹達は恭介の待つ、エリア４へと走り出した。

ギャワァッ！ギャワァッ！

それを見たドスランポスが怒りの声を上げながら追走してくる。

「今だ恭介！」

エリアの入口を抜けた瞬間、理樹が叫ぶ。

それに反応して恭介が構える。

グワァッ！

ドスランポスがエリアの入口に現れた瞬間、

ドンッ！

ボウガンの発射音が響き

ドォォォン！

凄まじい爆発がエリアの入口で起きた。

決着！（前書き）

書けたので登校です。やっと慣れてきました。

決着！

爆発が収まると、そこにはランポスの死骸が散乱していた。

しかし……

「流石群れのボス、そう簡単には倒れないか」

ドスランポスは体は焦げ付き、片足を引きずりながらも立っていた。

「やっぱり大樽爆弾じゃ厳しかったね」

理樹は本当は大樽爆弾Gを使いたかったのだが、予算と材料の都合上手にいれることは出来なかった。

「けど、かなり弱ってるはず、恭介！」

「おう！」

理樹の指示を受けて恭介が再び動く

「真人！　謙語！」

「まかせな！」

「承知！」

さらに真人と謙語がドスランポスに斬りかかる。

ドスランポスは応戦しようとするも、やはり爆弾によるダメージが大きいらしく、二人の攻撃をまともに受けて吹き飛んだ。

そこにだめ押しとばかりに理樹のチェーンブリッツからＬＶ２通常弾が撃ち込まれる。

ギャワアアア！

ドスランポスもたまらず悲鳴をあげる。

しかし、そう簡単にはいかない

ドスランポスの悲鳴を聞きつけて新たにランポスが１０体近く現れたらのだ。

「ちっ！　うっとおしい奴らだぜ！」

そう言って真人が大剣を振りかぶる。

しかしそれを理樹が止めた。

「待って真人、真人はそのままドスランポスの相手をして！　謙語と僕でランポスを倒すよ！」

その指示に従って二人が動く、理樹が散弾でランポスの気をひいているうちに謙語が一体、一体確実に倒していく。

一方真人は理樹の指示に従いドスランポスに向かう、あの時の理樹の指示から、真人は自分は理樹達がランポスを倒すまでの時間稼ぎをしなくてはならないことを理解していた。

真人のことを考えればあり得ないほどの察しのよさだが、理樹と高校で2年、こちらの世界の学校で3年、合計5年間もルームメートとして過ごしてきた時間がそれを可能にしていた。

真人は無理せず、大振りになって隙を見せないように攻める。ドスランポスも先程一撃を受けているだけあってその威力を知っているのか、回避に専念しており真人は時間稼ぎの責務を果たすことが出来た。

「こいつで！」

その間に理達は8体目のランポスを倒していた。

しかし流石に数が多く全部を牽制できず、残り2体のランポスの接近を理樹は許してしまっていた。

「くっ！」

接近を許してしまった理樹は飛び掛かってきた一体目をサイドステップでかわすと至近距離からその脳天にチェーンブリッツの銃口を突きつけて引き金を引く。

至近距離からのＬＶ１通常弾の速射を受けてランポスの頭が砕ける。

しかしもう一体が噛みついてきたため理樹はかがんでかわす。

ランポスは追撃を仕掛けようとするが、

「謙語」

「ああ」

戻ってきた謙語に斬られて倒れた。

一方、真人は視界の端で理樹達が最後のランポスを倒したのが見えたので自身も攻勢にでる。

「ぐおりゃあああ！」

先程まで以上に深く踏み込み必殺の一撃を叩きこむ。

急に深く斬り込んだ真人に対応できずまともにくらってドスランポスが吹き飛ぶ。

そこに理樹と謙語が駆けつける。

なんとか起き上がったドスランポスは自身の仲間がすべて倒されているのに気付き愕然とする。

仇を取りたいが自身もかなり不味い状況にある。

結果、ドスランポスが取った行動は逃亡である。

足に力を籠めると一気に理樹達を飛び越してエリアの出口に向かう。

しかしそれは叶わなかった。

ギャワアアア！？

エリアの出口でドスランポスが硬直する。

理由は足下にあった。

「よし！　しびれ罠にかかったよ！　真人！謙語！」

ドスランポスがかかった罠の名前はしびれ罠、ランポスの亜種ゲネポスの牙にある痺れ毒を使った罠でかかるとしばらく麻痺して動けなくなる。

理樹の号令を受けて二人が近くに置いてあった荷車から大樽爆弾をドスランポスのそばにセットする。

「恭介！」

二人が離れたのを確認すると理樹が叫ぶ。

返事は一発の弾丸だった。

あやまたず大樽爆弾に命中。爆発が起きた。

爆発が収まると、そこには倒れて動かないドスランポスの姿があった

「「「よっしゃあああ！！」

四人は歓声を上げると一斉にドスランポスに駆け寄った。

全身が焦げていたが、間違いなくドスランポスは死んでいた。

「よし！　これでクエスト達成だな。理樹、よくやったぜ」

ミッションコンプリート！！

四人は勝利を喜んだ。

「流石理樹だぜ、逃げ出すのを見越して罠を仕掛けとくなんてよ」

「いや、仕掛けたのは恭介だよ」

「だがそれを指示したのは理樹だぜ、やっぱすげえな理樹は」

そう、恭介が理樹から指示されてあの場にいなかったのは罠を仕掛けていたからである。

そして本人は2つある出口のうち一つをふさいでいたのだ。これもドスランポスを罠がある方の出口に向かわせる為の理樹の作戦であった

「それにしても何で逃げ出すのが分かったんだ？」

「それも学校で習ったでしょ？」

真人の疑問に理樹が答える。

理樹は鳥竜種が体力が減るとエリアから逃げ出して体力を回復させる特性があることをちゃんと覚えていたのだ。

大抵の新人ハンターがドスランポスを狩るときに失敗するのはこの特性のせいである。足が早いドスランポスに逃げられては追いかけるのも困難であるからだ。

ベテランならば武器も強力で逃げ出す隙を与えず倒すことが可能だが新人が使う初級装備ではなかなか倒せないのだ。

それを今回理樹は爆弾を使うことで補ったのだ。

「よーし！　じゃあ帰るか」

「そうだね、とにかくのんびり寝たいよ」

「ああ、俺の筋肉も痙攣してるぜ」

「そうだな、俺も疲れたな」

こうしてリトルバスターズ初クエストは大量のランポスや二頭のドスランポスといったイレギュラーもあったが大成功に終わった。

ちなみに、心配していた鈴に照れ隠しでハイキックをくらい理樹気

絶するといったハプニングもあったがおおむね村にも平和が戻った。

決着！（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

休息とモンペチ（前書き）

短いですが投稿です。

日常を書くのは難しいですね。

休息とモンペチ

「はーっ、暇だね……」

「そうだな……」

あのドスランポス討伐から1ヶ月が経っていた。

あれ以降、ランポスの討伐や、ファンゴの討伐依頼を受けてきた理樹達だったがそのすべての依頼をクリアし、現在受ける依頼がなくなるところまできていた。

「何かすることとあったっけ？」

「いや……ないな」

家の二階のバルコニーで寝そべりながら、空を眺めつつ話す理樹と恭介。

元の世界では見たくとも見れないであろう澄んだ空を見上げているとなんだか落ち着く理樹であった。

そんなこんなでまったりとしていると……

「理樹！」

いきなり凄い勢いで鈴がバルコニーに入ってきた。

「どうしたの鈴？」

驚きながらも尋ねかえす理樹

「お金はどこだ？」

「え？　鈴のお金なら恭介が預かってるはずじゃ？」

元の世界と同じく、鈴に渡すお金は恭介が管理していたはずなのでそう返す。

「なんだ鈴、なにか買いたいものでもあるのか？」

隣にいた恭介が身体を起こしながら尋ねた。

「ある、だからお金をくれ」

そう言って手を出す鈴。

「やってもいいが……何を買うんだ？」

「モンペチだ」

「「モンペチ！？」」

鈴の言葉に二人の声がハモる。

「えっと鈴、それは本当にモンペチなの？」

「そうだ、早く買わないと売り切れる、早くお金をくれ」

「どうする恭介？」

理樹が困惑しながら恭介を見るとすっかり目が覚めたように目を輝かせていた。

「分かった、鈴、金はやるが俺と理樹も連れて行ってくれ」

「わかった、ついてこい」

そう言うと鈴はバルコニーをさっさと出て行ってしまう。

慌ててその後を追いかけながら理樹が恭介に尋ねる。

「ねえ恭介、モンペチなんてこの世界にあると思う？」

「さあな、だがあったほうが面白いじゃないか」

「あ、やっぱりそういう行動原理だったんだね」

自分達もついていくと言い出した時は、鈴を心配しているのかと疑問に思った理樹だったが案の定そういう理由だったようだ。

鈴について行くと、村の広場の行商人の元に着いた。

近寄って見るとそれはあった。

『百年前から変わらぬ味、アイルー専用食モンペチ！！』

そしてそこにはビンに詰められたモンペチとおぼしき物が積まれていた。

ていうか百年前からあるんだ……

「恭介これだ」

鈴はなんの疑問を持つこともなく恭介のお金をせびっている。

「こいつは凄いな」

恭介も驚いているようだ。

異世界にもモンペチがあることに驚愕しながら鈴にお金を渡すと、恭介は行商のおじさんと話し始めた。

「理樹、手伝ってくれ　一人じゃ持てない」

「あ、うん」

そのまま理樹は鈴に促されるままモンペチを運ぶのを手伝った為、その日の夜、重大な発表が恭介から行われることを知らなかった。

「よし、明日からドンドルマに行くぞ！」

その宣言により、理樹たちはドンドルマに向かうことになる。

休息とモンペチ（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

新たな狩り場（前書き）

遅くなってすいません

新たな狩り場

ドンドルマ

それは大陸一有名な都市である。

何故か？　それはドンドルマにはハンターズギルドの本部があるからである。

ハンター、おそらくこの世界で一番有名な職業であり、世に英雄と謳われる人間を何人も排出してきた職業でもある。

一流のハンターになると、一人でリオレウスなどを狩ることができるため、ハンターズギルドの力はこの辺り一帯をおさめるシュレイド王国を越えており、完全なる自治を獲得、ドンドルマ周辺はさながら独立国家のようであった。

むろん、王国側もそれを黙って見ていたわけではなく、何度も干渉してきたが、一人でリオレウスと渡り合う屈強なハンター達を倒すことができるはずもなく、いまでは完全に黙認状態であった。

そんなドンドルマはハンターの拠点であることと相まって、物流、交通網が発達、色々なものが集まり王都を凌ぐ賑わいぶりであった。

そして、そんなドンドルマに向かう理樹達の姿があった。

「ねえ恭介、なんでドンドルマにいかなくちゃならないの？」

業者台で馬車を操る恭介に理樹が尋ねる。

「ふっ、それはついてから話すさ」

しかし先程から恭介の返事はこればかりではかばかしい返事は得られていなかった。

仕方なく理樹は口を閉ざすしかなかった。

そもそもの発端は1週間前にさかのぼる。

「で？　なんだって？」

夕食後、恭介の発言の真意を問うため理樹は恭介にたずねた。

鈴とモンペチを買った帰りに恭介が商人の男と話していたのには気づいていたが、それと関係あるのだろうか？

「ドンドルマに行くのさ」

何の迷いもない瞳で恭介が答える。

「いや、なんでそんな自身満々なのさ？」

理樹がツッコムが恭介はそれを無視して鈴に話しかけていた。

「鈴、お前も来るか？」

「あたしはいい、アーサーとノブナガの訓練がまだ終わってない」

「そうか、なら留守番だな」

「（こくり）」

鈴が頷く。

「よし、じゃあ残りの四人で出発だ、明日の朝に出発するからおくれるなよ？」

そういって話し合いはなし崩しに終了した。

（結局、恭介が何でこんなことを言い出したのか分からなかったなあ）

そして、いきおいに押されるままあれよあれよと事態は進行し、理樹は竜車の上にいた。

（もうすぐ着くし、着いてから聞いたほうがいいか）

すでにポルカ村をでて６日が過ぎており、順調にいけば今日中にドンドルマに着くはずだ。

（それにしても……一体恭介は何をするつもりなんだろう？）

竜車に揺られながら理樹は考えた。

「やっとついたな……」

そしてその日の午後、ドンドルマに到着した。

「それで？　今から何をするの？」

「まあ待て、まずはギルドだ」

到着して竜車を預けると、四人はギルドに向かった。

「いらっしゃいませ！　本日はどのようなご用件でしょうか？」

相変わらず騒がしい酒場を通って受付に向かうと早速恭介が切り出した。

「イヤンクックかドスガレオスの討伐依頼はないか？」

「はい、両方ともございます。　どちらにいたしますか？」

「じゃあ、ドスガレオスを頼む」

「かしこまりました。　契約金は２５０Ｚになります」

「ああ、これでいいか？」

恭介が差し出したお金を確認すると頷く受付嬢。

「確かに確認しました。　それではドスガレオス討伐になります。
　場所はエクメーア砂漠　ギルドの飛行船を利用してここから約三日となります」

「わかった」

そういって返事をするとさっさと受付を離れてしまう。

目の前のやり取りを呆然と見ていた理樹達は慌ててその後を追った。

「ちょっと恭介！　ドンドルマに来たのってこれが目的だったの！？」

酒場の一角で理樹が恭介に詰め寄っていた。

「そうだ、そろそろワンランク上の相手と戦おうと思ってな」

「それならそうと先に言っておいてよ！？　たいして準備はしてないよ！？」

密林や草原が狩り場であるなら、理樹もここまで詰め寄らなかっただろう。　それどころか、おそらく恭介だからと納得しただろう。

しかし、今から理樹達が向かう砂漠は雪山にならんでハンターの死亡率が高い場所であり、最も過酷な狩り場である。

雪山ならば寒さで体力が奪われようと、じっと動かず耐えていれば助かることは多い、しかし砂漠はそのようなことはない、新人ハンターの死亡率のみなら断トツの数字である。

そのようなところにたいした前準備もなく行こうとしたため理樹は激昂しているのだ。

「なにを言っているんだ理樹、だからこそいいのさ」

しかし動じることなく恭介は言い返してみせる。　鈴がいたならこいつ馬鹿だと叫んでいただろうがあいにくこの場にはいない、そして恭介がこうなったなら、どちらが折れるのかは明白である。

「はあ、もう分かったよ。　だけどこういうのは今回だけにしてよね！？」

そう釘を刺すと理樹は慌ただしく酒場を出ていった。　おそらくクーラードリンクといった道具を用意しに行ったのだろう。

それを合図に残りの二人も散る。

やることが決まったら後はそれぞれ自由に動く、それがリトルバスターズであった。

翌日、慌ただしく用意を整えた四人はギルドの指定した飛行船に乗り、エクメーア砂漠に向かった。

流石に飛行船は速く、陸路なら一ヶ月はかかったであろう道のりを僅か三日で走破した。

「では、クエストが終わったら信号弾を上げてください、すぐに向かいにきますんで」

「わかりました」

理樹が返事をすると飛行船は飛び立っていった。

ちなみに今回のクエストの期限は三日である。

四人はベースキャンプに入ると早速作戦会議を始めた。

「しかし砂漠は暑いな」

「まだここは岩影だから暑くないほうだよ」

「そうだな、しかし理樹どうするんだ？」

「あ、うん。とりあえず初日は砂漠に慣れるのと平行して、ガレオスの動向を調べておきたいんだ、できれば一度接触して行動パターンも探っておきたいね」

「ならそんなに荷物は要らねえな」

「うん、ただクーラードリンクは忘れないでね、下手したら死んじゃうから」

「へっ、俺の筋肉は死なねえよ」

「いや死ぬから」

「とにかく、すぐ出発だ。　今回は時間が少ないからな」

結局最後は恭介の言葉で出発点となった。

新たな狩り場（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

砂漠の脅威（前書き）

久しぶりの投稿です

砂漠の脅威

「暑いなぁ……」

ベースキャンプで理樹がつぶやいた。

とりあえずエクメーア砂漠に着いた理樹達は早速出発することにしたが、その前に装備品の確認を行っていた。

「ああ、ここがこれなら砂漠はどれだけ暑いんだろうな」

「だね、それより三人とも準備はできた？」

「ああ、筋肉の準備は万端だ」

「いや、そうじゃなくてクーラードリンクは持った？」

「ん？　ああ、ちゃんとここにあるぜ！　……って、うおおおおおおおおおお！？　クーラードリンクと間違えてマッスルエクササイザーを持って来ちまった！？」

「なんで！？」

思わず叫ぶ理樹

「どうしてマッスルエクササイザーがあるの！？」

あれは現実世界で真人が作っていた飲み物のはずだ。

「この筋肉馬鹿が、あれほど理樹が忘れるなと言ったというのに」

謙語が呆れたような声を漏らす。

「うるせえ！　たとえクーラードリンクを忘れようともマッスルエクササイザーを忘れるわけにはいかなかったんだよ！」

「いや、忘れちゃいけないのはクーラードリンクだからね！？」

たまらず理樹がツッコム

「まあまあ落ち着け三人とも、理樹　クーラードリンクなら俺が余分に持ってきてるから大丈夫だ。　ほれ、受けとれ真人」

「ああ、すまねえな」

「さすが恭介、助かったよ」

「ふっ、まあ今回ばかりは理樹も気が回らないだろうと思ってな」

「まあ、なんにせよ漸く出発できるな」

「よし、じゃあ行こうか」

とりあえず全員にクーラードリンクが行き渡ったのを確認して、理樹は出発の合図を出した。

「うわあ……」

「暑いな……」

「ああ、筋肉も悲鳴をあげてるぜ」

「むう、これでは五分と持たんな」

ベースキャンプを出た四人を待っていたのは見渡す限り広がる不毛な大地と、灼熱地獄だった。

「とりあえずみんなクーラードリンクを飲んで」

理樹の指示に従いクーラードリンクを飲む。

すると氷を飲んだような感触と共に体感温度が極端に下がったのを感じた。　さっきまで水がなければすぐにも倒れそうなほどの暑さだったのが今では標準的な夏の暑さ程度に減じていた。

「おお！　こいつは凄いな！」

「ああ、すっかり暑くなくなったぜ」

「よし、じゃあ探索にでようか」

そうして歩き始めた四人だが……

一歩踏み出す度に沈む足場
延々と続く同じ景色
降り注ぐ灼熱の太陽

砂漠の猛威は順調に四人を襲っていた。
「理樹、ここはどこだ？」
「エリア１の真ん中かな？」
「見渡す限り砂漠だな」
「モンスターの姿も見えねえな」

~五分後

「理樹ここはどこだ？」
「エリア１だよ」
「どこをみても砂漠だな」
「モンスターが見えないが」

延々と続く景色に意識をやられたのか、四人は同じような会話を繰り返していた。

「不味いね、日陰に行こうか」

そのうち水を飲んで正気に戻った理樹が誘導していなければ危なかったかもしれない。

エリア5

「うおおおお！！　生き返るぜ！」

理樹のナビゲートで洞窟にたどり着いた四人だったが、さらに奥に進むと地下湖があった。

しかし、そこは外の暑さと違い吐く息が白くなるほどの寒さだった。

しかしさっきまで砂漠にいた四人にとっては水があるだけでありがたい。

ちなみに真人は装備品を脱ぐなり、湖に飛び込んでいる。

「気温はマイナスなのに……」

理樹が呆れたような声を漏らしていると……

「いやっほう！！」

「って、　謙語！？」

隣にいたはずの謙語まで飛び込んでいた。

「ちょ、ちょっと謙語まで」

せっかくこの世界に来て、締まったと思っていた頭のネジがまたゆるんじゃったの！？

「お、おまえら………」

隣で恭介が震えている、そりゃそうだよね、こんな寒いところで湖に飛び込むなんt「俺も混ぜろよ！！」

「そっち！？」

まさかの仲間ハズレに対する怒りだった。

「ちょっと三人とも！？」

理樹の声は洞窟の中を反響しながら消えていった。

「「「ブルブル……」」」

十分後、唇を紫色にした三人を連れて理樹は再び砂漠に出ていた。

「あんなところで泳いだりするんだから……次からはしないでよね」

砂漠だというのに震えながら歩く三人を呆れた目で見ながら理樹が注意する。

「すまねえ、筋肉が暴走しちまった」

「すまん理樹、何故か飛び込みたくなってな」

「だが理樹、湖を見たら泳ぐしかないだろう」

真人と謙語は反省の言葉を出したが、約一名全く反省していない男がいた。

「恭介……少しは反省してよ」

理樹が頭を抱えながら言う

「ふっ、理樹のつっこみに対抗しないといけないからな」

「その反抗心はもっと別のところに向けてよ………」

と、いつも通り　　鈴に評させるならアホな会話が行われていたが

「!!　　止まって!」

異変に気づいた理樹が三人を制した。

そしてその判断が四人の命を救うこととなった。

ドオオオオン！！！

目の前の砂が爆発したかのような音を立てて吹き飛んだ。

「な！？」

そしてそこから姿を表したのは……

「ガレオス！？」

「いや違う、理樹、よく見ろ」

黒い体、そしてガレオスの倍以上の体躯

「ドスガレオスか！！」

間違いなく今回のクエストのターゲット　ドスガレオスだった。

砂漠を泳ぐ黒い影（前書き）

遅くなりました、諸事情ありましたがなんとか更新ペースは戻します

砂漠を泳ぐ黒い影

「ドスガレオス！！」

それに気づいた理樹達の反応は早かった。

「恭介！」

「おうっ！」

理樹の声を受けて恭介が動く

「真人と謙吾は援護して！」

「筋肉に任せな！」

「承知！」

真人が正面から突っ込んで気をひく間に、謙吾と恭介が円を描くようにしてドスガレオスの背後に回り込む。

『ぐあああああ！』

しかしドスガレオスもおとなしくしてはいない

咆哮と共に砂を吐き出してくる。

砂といってもドスガレオスの口内で特殊な唾液により固めてあるうえにそれを大砲のような勢いで打ち出してくるのだから堪らない。

「うおおおおお！？」

咄嗟に大剣を立てて防いだ真人だったがそのあまりの勢いに吹き飛ばされた。

「真人！」

思わず理樹が叫ぶ。

「へっ！　大丈夫だ理樹！」

しかし、真人は元気な返事を返してきた。

そこに追撃をかけようとしたドスガレオスだが、ブレスを吐いて無防備になった姿を謙吾と恭介は見逃さなかった。

「マーンッ！！」

謙吾がここ一番の気合いの声とともに袈裟斬りを繰り出す。

『ぐあああ！！』

ドスガレオスが怒りの声をあげる。

「ふっ！」

恭介は咄嗟に別の弾を込めて攻撃した。

ＬＶ２貫通弾がガレオスに襲いかかる。

『ぐあああああ！』

謙吾の攻撃を受けて倒れたことで無防備な腹を見せていたドスガレオスに過たず命中。

たまらずドスガレオスは悲鳴のような叫びをあげた。

「よし！」

そこにピンク色の影が走りドスガレオスに命中、強烈な臭いが辺りに漂った。

理樹が放ったペイント弾だ。

「よし、マーキングは終わったから、とりあえずみんな無理しないでドスガレオスの攻撃パターンを見極めていこう！」

「「「おうっ！」」」

理樹の指示を受けて再び三人が動く

今度は指示を出した理樹自ら動いた。

ドンッドンッドンッドンッドンッ

ＬＶ１通常弾の連続攻撃である、今回の狩りでは理樹はせっかくパワーアップした武器を敢えて持ってきていない

とにかく、ダメージは無視して相手の気を引ければいい

そう考えた理樹が手数を重視した結果だった。

威力は低いとはいえ、同じ位置に五発も当たれば流石にそちらに注意が向く、その隙をついて、真人と謙吾が斬りかかった。

「おらああああ！」

「めぇぇぇぇぇん！！」

両サイドからの斬撃、たまらずドスガレオスは砂に飛び込んだ。

「ちっ！」

恭介が舌打ちすると、武器をたたんで、走り出す。　同様に、理樹もチェーンブリッツをたたんで動き出す。

砂の中から襲い掛かってくるドスガレオスに対して、立ち止まっているガンナーはあまりに無防備だからだ。

「おい、理樹いたぜ」

そうして襲われないよう動いていた理樹に真人が教える。

言われた方向を見ると、黒い背鰭が砂の上に見え隠れしていた。

全員で頷きあうと理樹達は背鰭目掛けて走り出した。

「いくよっ！」

大きく見えてきた背鰭に向けて理樹が何かを投げつける。

それと同時に真人達は走りながら耳を塞いだ。

キィーン！

辺りに甲高い音が鳴り響き、次の瞬間砂の中からドスガレオスが飛び出してきた。

ガレオスは砂の上に飛び出すと悶えている。

ガレオスのような目ではなく聴覚を利用して獲物を探すモンスターは聴覚が異常に発達している。そこに強力な音を聞かせれば相手はたまらず悶絶してしまうのだ。

「今だよ！」

それを見た理樹の指示で全員が一斉に攻撃する。

『グワアアア！』

ドスガレオスが怒りの声をあげる。

先程から一方的に攻撃されたため怒ったのだろう。

確かに理樹達の動きは初砂漠、初のドスガレオス戦とは思えないほどであった。

「さっき湖に飛び込んどいて正解だったな！」

「ああ、まったく暑くない！」

「へっ、この動きにくい足場筋トレに最適じゃねえか！」

「あの動き！　また砂に潜るよ！」

「やらせるか！」

前傾姿勢をとり、砂に飛び込む仕草をみせるドスガレオス

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドン！ドンッ！

そこに理樹と恭介のボウガンから鉄甲榴弾が襲いかかる。

次の瞬間ガレオスはその身に五発の弾丸を刺したまま砂に潜り

三秒後……

ドオオオンッ！

『グワアアア！？』

爆発と共に戸惑った声を上げながら飛び出してきた。

先程のように悶絶こそしていないが意外な攻撃を受けて戸惑っていた。　何せ頭に喰らわせればリオレウスなどの飛龍種すら目を回す代物である。

「おらああああ！」

そこに真人の気合い斬りが炸裂。

「はあああああ！！」

謙吾の鬼人斬りが炸裂、戸惑った声が一瞬で悲鳴に変わる。

『グアアアアア！！』

凄まじい悲鳴をあげて悶えるガレオス、すでに腹から大量の血が流れ出していた。

いける！

そう確信した理樹達は止めを刺すべく動こうとしたが……

『グアアアアア！！』

突然狂ったようにドスガレオスは砂ブレスを乱射し始めた。

「うわっ！？」

「ぬっ！？」

「ちっ！」

「おわっ！？」

不意を突かれた四人は砂という慣れない足場であることもあって数発至近弾を受けた。

「くっ！」

舞い上がる砂に視界を奪われた理樹達がたたらを踏んでる間に、ドスガレオスは逃亡していた。

「くっ！　逃がしたか！」

悔しげな謙吾の声と砂に埋もれた真人を残しドスガレオスの姿は消えていた。

「キャンプに戻ろう、ペイントの効果はまだきいてるから大丈夫、それより僕らも思ったより疲れてるから一端休んだほうがいいよ」

「むっ、悔しいが致し方あるまい」

「そうだな、砂漠は初めてなんだ、それであれだけできれば上出来

と考えるべきだろう」
「ペッ！　うえー、砂だらけだぜ。おう、理樹の指示に従うぜ」
四人はキャンプに戻った。

「ふう、ひどく疲れたな」
「慣れない足場だ、当然の結果だろう」
「へっ、筋肉はまだいけると叫んでるぜ」
「それは真人だけだよ……」
そんな会話をしながら食事や武器の手入れを終えた理樹達はミーティングを始めた。

「さてと、今日の戦闘だけどけっこういいところまでダメージを与

えられたと思うけど、明日は厳しい戦いになると覚悟しておいてね」

「なんでだ？　相手が急に強くなったりすんのか？」

「いや、ドスガレオスは今日と変わんないよ、ただ明日はガレオスも出てくると思うから」

「ガレオス？」

「ドスランポスにとってのランポスみたいなものだよ、ドスガレオスは大体周りに数匹ガレオスを連れてる、そいつらが邪魔をするから戦いにくいんだよ」

「ふん、ならまずそいつを片付けるか」

「うん、だけどガレオスを倒すには音爆弾を使って引きずり出すか、僅に砂から顔を出す瞬間を的確に狙って攻撃しないといけないから」

「それなら俺が適任だな」

そういって立ち上がる謙吾。

「太刀使いで一番身の軽い俺なら素早く攻撃が可能だ」

「そうだね、ならガレオスは謙吾に任せて僕と恭介と真人でドスガレオスは抑えよう、せっかく駆除したガレオスのいるエリアに逃げられないように足止めが最優先だよ」

「ああ」

「へっ、泥舟に乗った気でいな！」

「それは今にも沈みそうだね」

「それをいうなら大船だこの馬鹿が」

と、いつも通りのやり取りをしつつ狩りは二日目を迎えた。

砂漠を泳ぐ黒い影～決着

狩猟二日目、理樹達は初っぱなから激しい戦闘をおこなっていた。

「真人！　そっち！」

「理樹！　後ろだ！」

「ちっ！　恭介避けろ！」

「メーン！！」

なぜ彼らがこんなにも激しく戦っているのか、それは３０分ほど後にさかのぼる。

☆

昨日着けたペイントの臭いを頼りにドスガレオスを見つけた四人だったが……

「なんだこりゃあ！？」

昨日と違い砂漠は動き回る背鰭におおわれていた。

「五十はいるな……」

「こりゃあ、骨がおれるし、下手したら音爆弾が無くなるぞ？」
「けどドスガレオスは動く気配を見せないし、長期戦でいくしかないね……」
「当たって砕けろだ！　行くぞ！！」
「おうっ！」
理樹達は群れの中には突っ込んだ。
そして冒頭に戻る。
「くっ！　さっきからきりがないな……！」
「うおっ！？」
「真人！」
「へっ、このくらいどうってことないぜ！　けどよ……」
「ああ、いくらなんでも多すぎる、しょっちゅう襲ってきて戦いにくいったらありゃしない」
「謙吾、残りは？」
「おおよそ30といったところだ」

「ぬああぁ、かなり微妙じゃねえか！」

「これでは先に俺たちの体力が先に尽きるな」

「よし、なら作戦を変えよう！　謙吾も攻撃に参加、出し惜しみしないで音爆弾も使ってとにかくドスガレオスに大ダメージを与えてエリアから追い出すんだ」

「おいおい、そしたらまたやり直しになるんじゃ……」

「大丈夫、たぶんこの辺りのガレオスはみんなこのエリアにいる、ドスガレオスが集めたんだろうけど、これだけ集中したなら周りはがら空きだよ、一対一に持ち込めば、こっちのものだよ」

「よし、では理樹の作戦でいく……ミッションスタート！」

キィィィィン！

カン高い音が響き渡る。

『グアアアア！！』

ドスガレオスと周りのガレオス達が堪らず飛び出してくる。

「おらあああ！！」

そこに真人が気合い斬りを

「はあぁあ！」

謙吾が回転斬りを喰らわせる。

二人が狙ったのは昨日深く傷つけた腹。

結果、完全には治癒しきれなかったであろう腹から大量の血が流れ出す。

そこに追い討ちをかけるように理樹と恭介の貫通弾が襲いかかる。

無防備な上に昨日傷つけられた腹を連続して狙われたドスガレオスは更なる痛みに悶え苦しむ。

それだけでは止まらない、そこにさらに真人が追い討ちをかけるべく大剣を振りかぶる、しかしそこに音爆弾から逃れたガレオスが襲いかかる………が

「メーン！」

謙吾に一刀両断される。

そして真人の渾身の一撃が振りおろされる。

『グアアアアアアアア！！！』

ガレオスが今までで最大の悲鳴をあげる、そして真人の渾身の一撃は見事にドスガレオスの腹を切り裂いていた。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！

その開いたら傷に容赦なく鉄甲榴弾が襲いかかる。

過たず命中、そして……

ドオンッ！！

爆発した。

『ガアアアア！！』

流石に体内での爆発は堪えたのだろう、しかしドスガレオスは最後の力を振り絞ると砂に飛び込んだ。

「よし！　あれだけの怪我、絶対眠る。もう一息だよ！」

「おうっ！」

「ああ！」

三人はそれを見届けるとガレオス地獄から飛び出した。

そして……

「「「イヤッホウ！！」」」

湖に飛び込んでいた。

「何で！？」

「いやー、暑くてよ」

「ああ、ここにいれば涼しいからな」

「それに湖に来ちまったなら泳がねえとな」

そういって泳ぐ三人だったが……

「あれ？　理樹は？」

「おい、理樹？」

「うおおおお！　置いていかれたー！！」

理樹に置き去りにされていた。

そのころ理樹は……

「いた、ドスガレオスだ」

寝ているドスガレオスのそばに大タル爆弾Gをセットしていた。

ボス級モンスターは重傷を負うと寝て治す。　実際すでに理樹の目

の前ではドスガレオスの血は止まり、薄皮が張ろうとしていた。

しかし……

ドンッ！

ドオオオオオン！！

理樹がボウガンを撃って点火すると凄まじい音と共に爆発。

『グアアアア！？』

ドスガレオスは悲鳴をあげて息も絶え絶えにのたうちまわったが、理樹に数発攻撃を受けると生きたえた。

「よし！　倒した！」

ミッションコンプリート！！

その後すっかり剥ぎ取りも終わり、キャンプに戻った後、ようやく真人達が唇を紫にして震えながら戻ってきた。

後日その話を鈴にすると「阿呆だな」という答えがかえってきたという。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1838r/

リトルバスターズ狩猟録

2011年10月6日20時34分発行